



「あれ、^{あね}姐さんはどうしたんです。お手洗いですか？」

「バカ左ノ、サイテー」

「え……、あ、すみません……」

女子二人の凍てつく視線に、左馬ノ介は縮こまって頭を下げた。

春花が客間を中座して、それと入れ替わるように、左馬ノ介が火鉢の炭の入れ替えにやってきたのだ。そして部屋に入ってきて、春花のいないことを見て取るや、そんなことを言うものだから、彼にしては珍しく^{ひんしゆく}顰蹙を買ったようである。

「謝らせないの、仁美。春花さんは何かを取りにちょっと出ていったけれど…
…多分、自室じゃないかなと思う」

「ああ、そうかもしれませんね。この離れなら部屋数ないですしね」

「なんだろうね、考えの足しになるモノって」

「なんだろう？」

左馬ノ介にしてみれば、仁美の言葉に返す雪絵の話の内容は、かいつまんで説明してもらったとしても、自分が女子組の間に入って、これ以後この部屋にいるのも何か場違いだと思えたので、その説明を求めることはしなかった。

その代わりに、女子会の塩梅はどうかと、義姉の声を聴きたい気持ちで話題を振った。

「うん、結構良いかんじ」

「良いかんじ、ですか」

「この子はもう、そういう時は『楽しい』っていうのよ～」

炬燵の中で、足で小突きながら仁美が笑った。

「う……ん、楽しい、かな……」

「はは、まあ、小難しい話もしていたんだけどね」

その言に、左馬ノ介はついでだとばかりに急須に湯を注ぎ、三人分の茶を淹れはじめた。

「難しい話ですか。それがどんなモノかは別にいいんですが、ならついでに姉

第三章 太刀の参

さん、少しは^{あね}姐さんとあの件について話したほうがいいですよ」

「あの件って？」

と仁美が義姉弟の顔を見回す。

「うん、春花さんが前から言っている、^{かしら}頭を誰かに据えるって話。私に継いで欲しいって言ってて……」

「それで、総会に顔を出すように言われ始めたんですよね」

「へー、そんな話があるんだ。それは知らなかったわ。ま、あんまり大っぴらにすることでもないか。私も黙っとくよ」

二人ともが頷くのを、仁美は出された湯呑を手元に寄せて見直した。

「でも、だから仁美、あなたの考えも聞きたい。ねえ、私にそんなことが出来ると思う？」

「……いやー、どうだろう。その性格だと難しい気がするなアタシは」

あはははっ と笑う仁美を、左馬ノ介が片目を細めて視た。

「ん、まあそういう冗談はおいておいて、真面目に言うとね、刀技だけでいえば春花さんと同等の仕事が出来なくもない、とは思うよ」

雪絵の前にも湯呑を進めて、左馬ノ介が頷く。

「そうですね、この郷の半分を納める頭とは、ただの業前だけでは難しいですね……」

それぞれの意見に、腕を組んでうんうんと頷きながら、雪絵は立ち昇る湯気を見つめる。

「ううん、でもだったら、何で春花さんは、そんな大役を私なんかにはやらせようと思ったんだろう。そこに関しては、いまだによくわからない」

「でも、これでその期待には応えようとはしているんですよね、姉さんは」

「ふーん。で、直接訊いてみたりしたことないの？」

ふう、と湯気に吐息を吹きかけて、雪絵は仁美を視る。

「もちろん、あるよ。二、三度訊いてみた事はある。ただ、よく解からない答えだった。いつも『視えているから』って、春花さんはそれだけで。あとはあなたなら大丈夫よ、頑張りなさい……って」

第三章 太刀の参

後半はどこか声がスキップしているように話す雪絵だった。ふうん、と語尾をあげて仁美は返す。

「それにね、別の時はこう言っていた。『あなたが継いでくれるのなら、私も嬉しい』 って」

「そんな風に言われたんでしたっけ」

と今度は左馬ノ介にも相槌を打たれた。

「左ノくんさ、顔がニヤついてるぞ」

「え……っ、そ、そんなことはないですよ」

仁美の言葉に左馬ノ介は、急須を片手に顔をピタピタと触ってしまった。そのからかいに抵抗するために、左馬ノ介は視線を回し、ふと気付く。

目に留まった、畳の上の盆。そこに載る、包装紙がかぶせられた箱。視た感じ、菓子箱にも受け取れ、しかもこの郷の品ではないようにも考えられた。

左馬ノ介は僅かの間、沈黙する。

「姉さん、これ何ですか？ いらぬモノなら、ついでに下げますが」

「あ、これは仁美からの頂きモノだよ」

「へえ、仁美さん好きですね、みやげを持ってくるの」

「まあ、モノを選ぶ楽しさ、買う楽しさもあるからね」

「当然、それに加えて、贈られて喜ぶ人の顔と、珍品に困惑する顔を視るのが楽しみなんですよね」

「なんだとコラ、左ノー！ あはははっ」

やりとりをする二人を見つつ、雪絵は箱を手に取り、それを開けて中身を左馬ノ介に見せてやった。

「チョコレートだって。西方で出回っているモノで、中々美味しいんだよ、これが。知ってる？ 左馬ノ介」

「はあ、チョコレートですか。まあ、知っていますよ。師匠の嗜みに与って、だいぶ昔に口にしたことがあったような気がします」

「へえ、でも左ノくんはさあ、今の西方のブームは知らないんじゃない？ 私がこのチョコレートを贈った意味というヤツをさ」

第三章 太刀の参

胸を張る仁美に、別段気を悪くした風もなく、左馬ノ介は訊いてくる。

「へえ、なんですか、それ。まさか贈りモノに愛を込めています、みたいな直截的なのではないですよ？」

ばかり、と仁美の握り拳が左馬ノ介の脇腹にめり込んだ。

仁美が荒い息を吐く。雪絵はそんな仁美と左馬ノ介の両方に顔を回して、

「……当たりだよ、左馬ノ介。何も言い当てなくてもいいのに」

と瞼を伏せた。

結構痛かった脇腹をさすりながら、左馬ノ介は苦笑いをして声を出す。

「へえ……、それはまた、お安くないですね。なんでまた急に。百合の花の季節でもなし」

またもう一発を、今度は肩に喰らった左馬ノ介だった。

「ごめんなさい」

「あー、まあねえ、西方の最近の新しい風習で、二月十四日に愛の誓いや告白としてチョコレイトを贈るっていうのが出来てさ、ヴァレンタイン・デイっていうの」

頭をさげる左馬ノ介に、一応のケジメをみたのか、息を吐くとそんな説明をする。

「仁美は面白そうだったら何でもいいカンジだから、多分、本来の意味ではくられてないよね」

「……まあそうでしょうよ……」

いてて、と左馬ノ介は雪絵の見せてくれる黒くて小さな塊を見つめる。

「……………」

「左ノ？」

「オイオイ、これは雪絵にあげたんだから、あんたのはなーいのっ」

「……………ああいえ、そんな、何でもありませんよ」

手を振る左馬ノ介を、雪絵が不思議そうな顔で視た。

「じゃあ、さっさと仕事をして引きあげます。いつまでも炭を変えていないと冷えちゃいますしね」

第三章 太刀の参

そう言って、火鉢に向き直り、持ってきた使い古しの金属のバケツに入っていた炭を、火鉢でいじり出した。

「お待たせ、二人とも。あれ、部屋がさつきよりも暖かいような」

「はい、今さつき炭を変えていったんですよ」

「そう。……あはは、どこに片付けたかわからなくて、ちょっと探しちゃったわ……」

春花は席につき、腕で抱えて持ってきた巻物二本を宅においた。

「それはなに？ 春花さん」

「先代が遺したモノよ。先代は、そのまた先代から、ずっと遺こってきたそうだよ」

「しかし、何、ボロいね」

「ははは、雪絵、確かにボロいけれど、こういうのは年代モノって言うんだよ」

「んー、まあ雪絵も仁美ちゃんも、見てごらんささい」

そう言って、一つを解いて広げたのは、掛け軸になる絵だった。そこに描かれていた一つの図柄に、雪絵は先程の春花の話の時のような、頭の上に疑問符がうかぶ難解そうな顔をした。

「これは……なに??」

「これは曼荼羅ね。胎蔵界曼荼羅」

「まんだ、ら？ たいぞー……？ それって……なに？ こんな初めて見るけれど、なんなの、これ」

「まあ、簡単にいうと、仏の一覧表かしら」

「仏……というと、隣の坊さんたちが手を合わせている、あれ？」

なんでそんなモノが、武侠の頭の部屋から出てくるのか、雪絵には合点がない。そもそも、仏が大量に描かれた絵で、一体何になるというのか、と疑問は深まる一方だった。

「そっか、獅土堂は家系的に仏門の大家でもあるんでしたよね。本拠地であるこの本邸の敷地の半分が、広大な寺院なんでした。私もあっちには入らないか

ら、すっかり忘れてました」

眉根を寄せる雪絵の横手から同じく巻物を視ながら、仁美が言った。

「そうね、順を追って話すとということ。東であの家が神社を司るように、西はウチが仏門を仕切っているの。雪絵は知らなかったかしら」

「.....知らないな。この組の仕事の一環ってこと？ 屋敷の内外で僧衣の丸い頭をよく視るなあ、と思っていた程度だよ」

「そう、まあこの機会だし、少し話をしましょう。情操教育にもなるでしょう」

「じょーそーきょーいく、ってなに？」

「簡単にいうと、心を育てるってことよ」

と春花は小首を傾げてみせる。

「仏というと、宗教めいていて、かしこまったり神秘主義だったり、偶像崇拜だったり、思い感じることは微妙な人も現代ではいるけれど、今求めるのは、そうね、要はお寺にある仏像を視て侘び寂びに似た精神を刺激して.....感受性から何かを学ぶということよ」

「ふむ、武俠としてはそのくらいでいいですよ。あんまり信心に傾倒するのは、荒事には向かないですしね」

「仁美ちゃんは、都度いい補足をしてくれるわね。その点をはっきりとさせる意味でも、先に言っておくけれど、信仰を強く持つては駄目よ。それは人を殺す道である、刀で生きることを妨げることになるわ」

「刀の道の妨げ.....」

ごくりと唾を呑み込んで、警戒心を顔いっぱいに出して雪絵は春花の話を聞く。

「そのつながりのある話でね、私の先代はね、そういう人だった。強い武俠でもあったけれど、殺した命に報いることを、最終的に仏門に帰依することで果たそうとした。それで私に頭梁を譲ったわ」

「.....」

卓に置かれていた自分の分とおぼしき湯呑を手にし、春花は薄く笑う。

「先代の獅士堂緋蓮としては尊敬しているわ。でもね、先代は強い人だったけ

第三章 太刀の参

れど、純粋な武の探究者としての武侠ではなかったからね……あの人は、当時の乱れに乱れた郷の治世——平安のために生きていたから。でも、だからかしら、多くの命が失われたことに、あの人は人間らしい弱さを感じていたのよね」

「武侠としての芯がぶれていた？」

「それは在り方のひとつとして認めるべきだったんだけど、私は今でもあれは先代の心の弱さでもあったんじゃないか、と思うところもあるの」

だからかしらね、と春花は笑う。

雪絵は、その表情が、今迄に視た春花の顔で、一番寂しそうに感じられて、心の奥で齒噛みした。

(この人を哀しませることをしちゃ、いけない。先代がどんな人でも、私は…)

「私たちは、強く在らねばならないのよ。だから、信仰は駄目。憶えておいてね、雪絵」

心を育てる、か。と雪絵は思い、春花に頷いてかえした。

「でも雪絵、仏さんを敵視はしないほうがいいぞ。堅気さんはそれを大事に思ってるんだから、それは巡り巡って堅気さんに冷たくするのと同じなんだからな」

「そうね、さすが仁美ちゃん。そのことも大事ね。じゃあ、ちょっとこの掛け軸も視て行こうかしら」

仁美に胸の内を親指を立てて返すと、春花は流麗な指先で図柄を差した。

「この曼荼羅には人物が沢山座しているでしょう。この穏やかな顔をしているのが、いわゆる仏様。亡くなったご遺体を指して『ホトケ』というけれど、それとは区別するわ。この図を視てみる通り、中央から四方を囲み、三層が外へ広がっているわね。それぞれの層にも意味はあるのだけれど、仏門の端くれでありながら、武侠でもある獅子堂が重んじるのは、三つ」

春花は巻物の図柄の中央、八つの仏と葉によってなる、その真ん中を指し示す。

「これが仏の最上とされる如来。大日如来さま。八葉の蓮花卉の中央にある主

尊ね」

「……ふうん。蓮の華の中央にあるって、なんかいかにもというか、高貴そうという感じがしないでもない」

「この仏の象徴するのは太陽だったわね。世界そのものを表わすの。それは同時に一切を智^しることを表わすみたいね」

「一切を智る……？」

「世界や人、モノやコトの本当のところを知り、サトリを得ているということね」

「自内証……でしたっけ、その象徴が大日如来」

ストールを指でなぞり、仁美が言う。雪絵が首をかしげるので、春花が説明した。

「自内証というのは、心の内の悟りね。自らの心から生じて覚ること。また、サトリを智慧ともいうわね」

「……サトリって、何かを解かるということでしょう。何かを解かるって、獅士堂は何かを解かる必要があるということだよ。それって……」

「あなたが悩んで、答えを探そうとしていることに似ているでしょう」

「……うん」

考え込む雪絵の背中を、ばしん！ と叩いて、仁美が快活そうに笑んだ。

「別に仏門じゃなくてもね、人間は武侠も堅気も生きてりゃ各々悩むことくらいあるってことさ。これを、衆生は苦悩に満ちているとか言ったりするもんでさ。特別に考えないことー」

「なるほど、確かに」

「そう、人の悩みや苦しみに救いを与えることを教えに据えているけれど、何かに頼って苦悩を和らげることを由としない人間は、無暗にありがたがる必要はないわね。人が悩むのはありふれているもの」

「うん、自分の悩みは自分で背負うべきだと思う。誰かや何かに肩代わりしてもらうなんて、恥ずかしい」

あら、この子も恥ずかしいなんてことを言うようになったのね、と春花は内

心で笑う。

「ちなみにね、雪絵。この自内証というのは、こういう意味もあるの」

『真実を自ら悟らねばならない』

「真実を自ら……」

その言葉は、胸の内にやけに大きな反響音をもって広がったように、雪絵は感じた。胸の、そして腹の、心の内側にすんと沈みおちるかのような。

白峰も言っていた、『そのうちわかればいい』 というのは、要は時間をかけて解かり、悟ればいいのであり、だから焦らず構える、という意味ではなかったか、と雪絵はそう思った。

――ならば。

「だったら、私も自らで答えをださなくちゃならない……のか」

まぶたを半ば閉じて、そうつぶやく雪絵を、春花と仁美は視る。

その表情に、彼女たちはまだ人として幼く拙い少女に、頼もしいモノを視る思いになった。

不敵に笑んでいる。

それは、自らの戦うべきモノと、戦い方の両方を己の内にみつけたかのような――そして不屈を抱き、自身を知る道の遠大さに自然と口元が緩んでしまったかのような――雪絵自身がこれまで自覚しなかった不思議な笑みだった。

(人は、こういう時にも、こうも笑うのか)

(だったら……仁美もだから、私に挑み笑ったのかな)

(春花さんが常に微笑むのは、戦って得たモノがあるからなのかな)

「……私も戦うよ。戦って、智ってみたいと思う」

「おお!」

「ふふ……、それはいいわね」

夜の雪化粧の庭に、三人の笑い声が響いた。

「ところで春花さん、重んじる三つのうちの、あとの二つは？」

ひと息ついて、仁美がそんな風に場を仕切り直す。春花も、そうねえ、と再度卓のうえの掛け軸を視る。

第三章 太刀の参

「なんだか話のながれとしては、もう十分な気もしなくもないけれど、話しておきましょうかね」

と、春花は指を曼荼羅の中央付近から左の方向へすべらせる。

「この曼荼羅は中央から外側に向けて院があつて、おわす仏が異なるのだけれど、その院にもそれぞれ意味があるの。この左の座は、呼び名を『蓮華部院』と言うわ」

「蓮華……」

「中央右の金剛手院が知恵を顕わすのに対して、この左の別名、観音院は慈愛を顕わすそうでね……なぜこれを挙げるかは、ひいては獅土堂が重んじるかは、わかるかしら、雪絵」

一拍の間考え込んで、雪絵は口を開く。

「……尊意と関係している？」

「そうね。じゃあ、仁美ちゃんはどう思う？」

「ふうむ、太刀合う相手への慈悲……じゃないですかね？ 慈愛というよりも腕を重ねて、首を傾げる仁美に、春花は微笑む。

「そうね、大体はそうだと言えるわ」

「一体なんなの春花さん……あつ、それもまた自内証なのか……」

雪絵が口に手をあてる様をみて、春花はふふ、と瞳を細めて嬉しそうに笑った。

「必要のないことをここに据えることはない筈よね。明治初期から現在までの獅土堂の歴史に連綿とあり続けたのだから、意味はあると心得てね」

うんうんとうなづく雪絵と仁美。

「じゃ、三つ目だけれど、今度はここ。『虚空蔵院』 よ」

そう言って春花が示すのは、中央から一層よりも更に外周の、下部の院。

左右の端に大きな仏が坐し、中央にも同様の大きな一仏。焰を纏ったツルギを手に行っていることで目立って見える仏だった。

視線を留める雪絵。その中央の仏を指差し、春花は続けた。

「これが『虚空蔵菩薩』 様。虚空を蔵する者。虚空を胎内に孕むという仏

よ。実は獅士堂の一派は、この虚空蔵菩薩を御本尊としているのよね」

「こくう？」

「虚空というのは、一切のモノが何の妨げもなく、自由で自在であること。この菩薩は。廣大無辺の虚空のように心が在れる力を顕わしているといえるの」

「……………ふうん」

今春花が話してくれた仏とは、雪絵にとってこれまで、遠目に視た寺院の木や石の作りモノや、道沿いの地藏などを目にした、そこにある作りモノ……物体としての存在でしかなかった。それに、あれこれと謂われがあると教えられたわけだが、正直な話、雪絵にとっては馴染みのないことだ。それが何か遠大な力を象徴するといわれても、ピンとこないし、そんな力を有した存在が本当にいるのか、そんなモノはお目に掛かった事もないな、とも思う。しかし、それが獅士堂の太刀のところに関わりがあるのならば、それも自らの力になるのでは……と雪絵は記憶しようとする。

思いを巡らせても、雪絵は本当にピンとこないが、自分の頭で自分の解釈をしようと試みる。

慈愛や慈悲。廣大無辺な虚空。

そして、サトリー—智るということ。

正直、雪絵にはこれは刀技でいうところの、四戒などの概念理論と近しい捉え方しかできない。もとより、無頼の武俠が熱心に神仏の存在を肯定している訳ではないだろうと想像がつく。だが、自らの守護や苦悩を解き放つ力という恩恵が仮にあったとして、それに与れなくとも、そこに心を強くしたり、方向を定める切っ掛けがあるというだけでも、人は前に進む一助を得ることが出来るときがある。

つまりは、神秘的な存在として信じる信じないとは別に、意識を前向きにさせる力になれば、それだけでもその存在の扱い方として成り立つのだということ。

春花はこの曼荼羅の元の持ち主と違い、そのくらいの認識に留めている。そして、武俠としての気位を胸に生きていくのなら、それが正しい在り方だと考

える。

（虚空を蔵する者や、サトリというモノが、何がどうなって刀を振るうことに関わって来て、必要なのか、必要になるのか、本当に必要なのかすら、今の私には解からないけれど……でも、今すぐに考え至らなくとも、心に置いておこうと思う）

一見して訳が分からない事柄ながら、雪絵は自らの心でそんな整理をした。

春花も白峰も、いずれわかる時がくる、焦ることはない——と、そう言う。雪絵も今は、その言葉に信頼をおこうと思った。

雪絵の横顔を視て、春花は口元を弧にして瞼をおろす。

「何よりね、時間がかかろうとも、自分で見出した答えが力を持ち、意味があり、尊いの。それが間違っている時くらい、人だからあるかもしれないけれどね、それを恐れず、励み、進みなさい。いいわね、雪絵も、仁美ちゃんも」

「はい」 「うん」

頷く二人を視て、春花はもう一つの巻物に手を伸ばし、それを解いて広げた。その巻物には、先の虚空蔵菩薩を含めて、五体の仏が描かれている。

「仏画は五大虚空蔵菩薩よ。それぞれが四方にあるのがわかるかしら」

「あ、ひょっとして、これは獅士堂の四聖と重なるんでしょうか？ 四方の仏の乗る動物の色が、少し違うけど対応しているのかな」

「ああ、そう考えると、中央が獅子に乗っているのが、確かにそれっぽいね」

「ご明察ね」

両手を重ね合せて、春花が笑んだ。

「まあ、これはそういうあやかり方をしている、程度に見てちょうだい。獅士堂の組がどういう成り立ちをしているかを理解する助けになるんじゃないかしら」

「ふ～ん」

「あとは、雪絵も仁美ちゃんも、最後にこれをしっかり憶えておいてね」

そう言う春花の顔は、幾分神妙な顔色になっていたもので、雪絵も仁美も居住まいを正して春花に向いた。

「はっきり——そして先に言ったことを重ねて言っておくわ。仏の教えという信仰に心を傾けては駄目よ。少なくとも、刀を振るい続けるのならば……人を斬る重みを背負う覚悟があるのなら、間違えても信仰に心を割いては駄目。こういうモノを見せるのに、それを危惧した気持ちが先にあったけれど、あなたたちも侠気の道に生きるつもりなら、その機微を一度しっかり言い聞かせておきたかったの」

どこか遠くの方を視るようにして、春花は言葉を続ける。雪絵は、この時春花が彼女のいう“先代”を少し責めているような気がした。普段全然と違ってよいほどに、怒りの機微をみせない春花だからこそ、その腹の奥にあるちらちらと炭がくすぶるような怒りの火種が、熱を持ってあたりに……雪絵の心に漂って来ていたのだ。

「信仰に傾く心は危険だと心得なさい。それは私たちの刀に生きる道——人を殺す道でもあるそれを妨げることになるから」

その幽かな怒りが伝播した訳ではないのだろうが、雪絵も思う。

気位に欠け……いや、もっといって、刀で生きる業を背負うことから降りたのではないか？ 先代である武俠は。そう考えると、にわかに腹の底が波立つ思いだった。

「だからね、今こうして仏に関するモノを見せて、教えたのは、そういうモノに触れて思考の取っ掛かりにしたりするくらいのことと思いなさい」

そして、巻物をくるくると巻き納めながら、春花は瞼を伏せた。

「私たちは……獅士堂の太刀を振るう者は、強く在らねばならない……」

「春花さん……、ん？」

先に述べた事を、厳粛な声音で再度言う春花。その気位を見る思いの仁美だったが、その横をみて軽く驚き、苦笑する。雪絵がふつふつと闘気を湧き上がらせているような貌をしているのだ。

仁美は若干、引いた。ストールの影で苦笑しつつも、手をパタパタと振って雪絵に声を掛ける。

「どうした一、雪絵」

第三章 太刀の参

「……………いや、うん」

春花の視線が自分に向くので、雪絵は瞼を伏せて、胸に手をやった。

「強く在ること。その言葉が、今、より心に沁みたから」

「ふふ……、そう」

娘を視る瞳に柔らかなモノを含ませ、春花は涙袋を深めた。

「いやあー、話が色々広がったよねえ。少し何か飲みたいや」

「あ、それじゃあ、お茶を淹れなおそう。さっき、左馬ノ介が急須の中身を新しくしていったんだし」

「ん？ 私が席を離れている間に、左ノくんが来ていたの？」

ええ、と頷いて返す仁美と、火鉢の鉄瓶をとる雪絵。その子らの様子を視て、春花はふと、何かに気付く。

「あら、雪絵。あのチョコレートはもう食べ終わってしまって、処分したの？」

「え？」

突然の言い出しに、雪絵は何を言われているのか一瞬わからず、急須の蓋を手にもその言葉の意味を考える。

僅かの間。冬の強い風が、屋敷の離れを揺るがす。

「だってほら、その盆の上に置いてあったでしょう。白い包装紙を被せて。今その紙の下には、何もないじゃない」

「え……!？」

言われて雪絵は、春花の指摘の意味を理解する。

もちろん、自分は最初に箱を開けて半分を食べたあと、触ってはいない。いや、正確には先程左馬ノ介が来た時に、箱を開いて中身を見せていはした。しかし、自分も、誰もあのチョコレートを食べていはしない。

だから必然、まだ残っている筈だし、なによりも、その盆の上に置いて、触

っていない。

その筈だ。

――しかし。

広げられ、元の箱のカタチに折り目のはいった、そんな白い包装紙を、雪絵が手でめくって見ると、その盆の上には、本当に春花の言葉通りに何も、置かれてはいなかった。

「あれ？」

「ん？ どした」

チョコレイト紛失。

.....続く。